

ブロークの戯曲「見知らぬ女」について

西野 常夫

1906年に書かれた詩「見知らぬ女」《По вечерам над ресторанами...》(以下NP)(発表は1907年、「思いがけぬ喜び」所収)は当時、だれにも理解できぬ作品と評されたらしい¹⁾。やはり1906年に書かれ、1907年に「天秤」誌に発表された同題名の戯曲も、女主人公が聖処女を暗示しているとして上演の検閲で足止めをくらい²⁾、メイエルホリドによる上演予定が頓挫し、劇として舞台で日の目を見たのは5年半後のことである³⁾。戯曲「見知らぬ女」(以下ND)についてはブロークは1908年版の序文で上演には向いていないことを認めた。「孤独で複雑な現代人の心の中の出来事」をとらえるには「叙情劇」という様式が必要だと考えているのにである⁴⁾。仮にこの戯曲をレーゼ・ドラマと見なしても、その土台であるNPより解釈しやすいわけではない。登場人物が多い分だけ「鏡像構造」は複雑であり、まさに「鏡だらけの部屋に迷い込んだ」印象を受けるのである⁵⁾。

NPの難解さは詩の構造よりも、女主人公である見知らぬ女の意味と彼女に対する主人公の観点にあるのだろう。たとえば詩の中で女は実際にレストラン(日本語の感覚では居酒屋“кабак”の方が真相に近いであろうか)にいる主人公(語り手)の目の前に現れたのか、それとも酩酊した主人公のみた幻か夢と考えた方がいいのかという素朴な疑問が先ずわく⁶⁾。この詩の空想性、幽玄性のためにさらに彼女に対する主人公の観点や関係もわかりにくいものになっている。

NDはNPにある現実と幻想の交錯を踏襲しているが、人物構成が複雑なために作品全体として難解さが増幅される。また、やっかいなことに3幕とも「幻」“видение”と規定されているため、あらゆる非合理、矛盾が許容されるともいえる。しかしたとえ夢物語としても、なんらかの意味を問うこともまた可能であろう。以下は複雑な人物構成の解明および戯曲の基礎になったとされる詩群の分析によるND解釈の試みである⁷⁾。

(a) NDの人物間の関係

1) 詩人と神学生

この2人は第1幕の居酒屋で居合わせている。神学生は冒頭の登場人物名簿には記載がなく、“Посетители каба́чка”のひとりとされ、あくまで脇役として、主人公である詩人⁸⁾よりも軽い扱いになっている。しかし、詩人の世界観を際立たせたり、逆に、補足したりする上で、神学生の発言内容は大いに参考になる。

居酒屋の中では数個のグループが陣取って、それぞれ別個の会話が進められている。芝居の焦点が神学生のいるグループに巡ってきた時、そこでは神学生がある踊り子に対する賞賛の弁をふるっている。

神学生　それで、君、彼女の踊るさまといたら、そりゃあもう、まるで天女だ。
あの白いおててをとってさ、そのまま唇をうばってしまいたくなるよ...

飲仲間　(甲高い声で、はっ、はっ、と笑う) ほう、ヴァージニカ、これはまた、
随分な夢想をめぐらしたもんだな (размичтался)、(後略 — 引用者)。

(一同、甲高い声で笑う)

神学生　(すっかり赤くなって) おい、君、笑っちゃいけないよ。それで、こんな
風に彼女を抱えて、そうして下品な視線の前から連れ去ってしまいたいね、
それで、通りに出たら、ぼくの目の前で踊るんだ、白い雪の上でね... 鳥の
ように飛び回るだろうな。そうしたら、どうしてだか、ぼくの方も翼が生え
て、彼女の後を追って飛んで行くに違いない、白い雪の上をね。(IV, 74)

このように、神学生は現実の踊り子をやがて天女、ブロークのいわゆる「うるわしの貴婦人」のようなものにかえてしまう夢想家だが、彼の演説が彼以上の夢想家である詩人の登場のいわば前奏曲となっているのである。

詩人は一種のなりわいであって、第3幕にあるように、客の前で朗読するための詩を練るために、街から街をさまよっては、こういう居酒屋に足を踏み入れ、着想をノートにつけたりするのである(IV, 76)。つまり、NDにおいて地上の世俗界の象徴として設けられた書割りであるこの居酒屋も第3幕の客間も詩人にとって欠かせないものなのである。天上の女を歌う詩人の存在が、実は下界での居住権を前提にしたものであるというところにNDの(ひいては「うるわしの貴婦人」を歌い続けるブロークの)ロマンチック・アイロニーがあるといえよう。このことは後に触れる詩人の人格あるいは世界観の分裂性と関係

がある。

神学生の飲み仲間の言葉「(神学生に対して — 引用者) 空想家だな。だからこそ、飲むんだな。おれたちもみんな空想家だ」(IV, 77)の通り、詩人は酩酊するにしたいが、N Pの女主人公と同一視できる人物を声高に呼び始めるが、第2幕の山高帽の紳士と同様に詩趣を解すと自認しているとみえる外套の男から、地球に腰をかけた女の彫りものを見せられるにいたって、さらに気分が高揚し、目当ての女は、ニーチェ流の「永ごう回帰」の法則により、再び全世界を魅了する支配者の座についたと確信する(IV, 78-79)。一方の神学生も、あたかも詩人の高揚に対抗するかのように、踊り子の神秘性を唱え始め(IV, 79)、また踊り子に対する独占性を強調したりする(IV, 77)。こうして、詩人と神学生の人物像が重なり合い、2人がそれぞれ意味する2人の女の区別もあいまいになり、そのことによって同時に、詩人および詩人の目当ての女として第2幕以降に登場する流れ星の女の非地上性と地上性という二重性が暗示されるのである。

2) 詩人と空色の男“Толубой”⁹⁾と女(第2幕)

第2幕は主人公と「天から落ちてきた女」との出会いの場面である。

空色の男が実は第1幕の詩人であると断定する根拠は、冒頭で庭番に引っ立てられていた居酒屋帰りの酩酊の詩人が消えた直後に、この人物が流れ星の女に続いて登場すること(IV, 84)、女の顕現が第1幕最後の詩人の「青き雪よ。くるくるとまわっている。ふわふと降ってくる。青き目よ。あつきヴェールよ。あの女はゆっくり通り過ぎる。空は開かれた。現れよ! 現れよ!」(IV, 81)という呼び掛けに応えたものだと考えられること(IV, 81)、さらに、この人物が詩人と自称していること(IV, 85)などである。

この空色の男と天から落ちてきた女の言葉のやりとりは、前者が観念的、非地上的であるのに対して、後者が逆説的に日常の次元のものであり、意志疎通がかなわず(IV, 86)、2人の出会いはすれ違いに終わる。

第3幕の客間で2人は再会するが、しらふの詩人(もはや空色の男ではなく)の目に映るものは天からの女ではなく、地上の単なる見知らぬ女である(詩人は何食わぬ顔で遠くの隅に腰を下ろし、物思わし気に「見知らぬ女」をじっと見る — ト書き、IV, 100)。詩人の2度目の「呼出し」は失敗とわかり、絶望におちる(「私の探究には何の成果もありませんでした」IV, 102)¹⁰⁾。

詩人と空色の男の関係は、詩人に内在する空想性が過熱し、権化となったものが空色の男であると言えよう。そして、その変容の際に酒による酩酊が作用していることは否定で

きない¹¹⁾。

3) 詩人と山高帽の紳士 (詩人と自称し — IV, 88、「空色をしている」 — IV, 92)

山高帽の紳士の登場のしかたは空色の男の場合と似ている。

第2幕の中盤、空色の男が流れ星の女から立て続けに誘惑の言葉の攻勢をうけて、彼の本質である観念性が、焚き火の前の雪だるまのように融け去ってしまい (小声で・・・さらに小声で・・・黙りこむ・・・眠り込む、全身雪だらけで・・・空色の男はもういず、薄青色を帯びた雪の柱が舞い上がっている — ト書き、IV, 87-88)、かわりに、詩人の他の属性のひとつである即物性が生氣をえ、その権化としての山高帽の紳士の出番になるというからくりであろう¹²⁾。このようにみえると、詩人のなかの両極端な要因である観念性 (非地上性) と即物性 (地上性) が環境の影響 (酒や女) によってのみ作動していることがわかる。

一方、流れ星の女は、どこかへ消えてしまった空色の男のことをしばらく気づかっていたが (「あの人はどこへ行ったのかしら」 IV, 88)、紳士が「地上の言葉」を理解すると認めると、すぐに打ち解け、一緒に連れ立ってしまう¹³⁾。彼女の風貌や挙措には天のもの片鱗が残っているが (「あなたには何か変わったところがありますね」 IV, 100)、その言動は地上にいる間は第2、第3幕を通じて終始地上的であり、周囲の要因に左右されることはない。

4) 詩人と占星術師

この物語の中で占星術師は出来事の経過を客観的に解説する役目を果たしている。「マリヤ星」の落下 (IV, 84)、雪道での詩人、女、「空色の紳士」の動向 (IV, 92) を目撃したとして、夢物語にもひとつの信頼すべき脈絡を与えているのである。もしもこの戯曲が戯画化されていなければ彼は“звездочет”ではなく、“астроном”と呼ばれてしかるべき人物であって、その生真面目な性格は、酩酊による主観の肥大化のためひとり相撲をとる詩人と鋭く対比される (「あなたは星のことなど口にする資格はないよ。あなたはあまりに浮気だからな。」 IV, 91)。この客観の権化が面目躍如たる象徴的な場面は第3幕のやま場で詩人が見知らぬ女のことをとうとう思い出したかにみえた瞬間、彼が闖入して、結局、詩人の追憶をさえぎるくだりである (Мгновение кажется, что он вспомнил все. Он делает несколько быстрых шагов в сторону Незнакомки. Но дорогу ему заслоняет Звездочет в голубом вицмундире, входящий из передней. — IV, 101)。このことは、詩人の理想とした天上の女がしらふの詩人の前には現れることは客観的にみてありえないということである。

ある。

しかし、詩人が流れ星の女を見失ったのと同様に、占星術師も「マリヤ星」を喪失し、両者の悲しみが併置されている点で、2人はやはり一種の分身のようなものと考えていいだろう¹⁴⁾。

以上のように考えてくると、NDは非地上的な理想の女を憧憬する主人公と彼女の物語という構造に還元できるだろう。

(b) NDと詩群の関係

NPはNDと関連する5つの詩のひとつとして挙げられた1912年の時点で正式にNDと同じ題名を維持していた唯一の詩である¹⁵⁾。

この有名な詩についてはたびたび論じられているので、ここでは比較的新しいJ. E. ボウルトによる詳細な論考¹⁶⁾ にそって簡単に述べるにとどめる。ボウルトはこの詩を第6連までの此岸の世界、第7連の過渡的世界、第8連以降の彼岸の世界の3つにわけて考えている。此岸と彼岸は鏡の役目をする第7連を軸に反射しあい、語数は等しく100語づつで、表現も似ている(第2連の「遠くで・・・金色に光る・・・」に対し第12連の「遠くの岸では青い目が・・・」、第3連の「山高帽」に対し第9連「喪の羽をつけた帽子」等)。しかしそのようなよく似た用語にもかかわらず、前者が外界の現実の描写であるのに対して、後者は夢的世界で「彼女」と詩人がひとつの体に融合した心的風景の表現となっている(第10-13連)。両世界の境界を象徴しているのが第7連に出てくる窓で、その窓辺にすわる女(第8連)は詩人にとって現実の存在か夢の産物か決定し難いものである。ボウルトの解釈は趣旨は大体以上のとおりで、詩の構造に深い意味が託されているとしている。

NPの此岸の世界はNDの第1および第3幕に受け継がれていることは明らかである。しかしNDの第2幕の雪道の場面はNPには見当たらない。NPにおいては主人公は終始居酒屋の中にいる。雪道の場面はNPの主人公の夢が肥大して新たに独立した書割りを描きあげたものと考えることが出来る。NPの山高帽の男(第3連)は同じいでたちでNDの第2幕に再登場する。

ブロークがNDと主題を共有するとして挙げている詩群のうちNPの他の詩も簡単にみ

てみよう。創作順ではまず1905年8月の《Там, в ночной, завывающей стуже...》(II, 81)であるが、10行目は1915年の変更前は《Разверзающий звездную муть,》となっている。この謎めいた12行詩では、吹雪が吹き荒れる冬の寒空に散りばめられた星座のレース模様“кружева”からひとつの女の顔が浮かび上がるさまが表現されている。その顔は吹雪の訴えるような唸り声か響く天空を駆け、体の冷え切った「私」に熱く燃えるようなメッセージ“жгучая весть”を送る。「私」が長い間待ち焦がれていたこの心の友“Мой от века загаданный друг”はやがて雪明かりのかなたに消え去る。雪あるいは吹雪と女という構図は後の連作詩「雪の仮面」や「ファイーナ」さらに戯曲「ファイーナ」と共通するものであり、一種の激情を象徴していると考えられる¹⁷⁾。NDと比較してみると、第2幕で、地上に降り立った女が詩人を誘惑しようとするが、果たせず、ほどなくして詩人の目の前から姿を消すという筋書きと照応することがわかる。

次の1906年3月の《Твое лицо бледней, чем было...》(II, 183)は初版では「見知らぬ女に」と題され¹⁸⁾、1912年の詩集では「出会い」と改題されていた。この詩でも冒頭で「私」の前に女の顔が現れるが、2人の地上での出会いはおそらく今日が2回目で、2人とも現実の人間として街角のどこかですれ違ったのであると考えられる。第3-4行の「あなたが一瞬歩みを緩め、すぐまた、たそがれ時の町を軽やかに歩みを早めたその時」(когда, замедлив, торопила / Ты легкий, предвечерний шаг.)は夕刻の天体の運行のさまをも暗示するよう意図的に表現されたものであろうが、それは女がかつて天体であったからである。この2行の暗示性を念頭に置くと、冒頭の“Твое лицо бледней, чем было”も天体の表面の輝きの鈍化が、「私」にとってかつてはまぶしく輝ける存在であった女の力の衰えを象徴していると解釈できる。第9行の「いいかい、ぼくら2人は天と知り合いだったのだよ」、第13-15行の「ぼくらは幻妙な知恵でもって同じ高さを保っていたのに霧の陰で一緒に失墜してしまったのさ」、第21行の「彗星よ!」から、2人が天空から地上に落ちるはめになったということを男は覚えているということがわかる。NDにおいては、空色の男がもとは天空にいたということは語られない。地上の言葉が話せないのは詩人だからであり、体中が空色なのは長い間空を見上げたためだと説明される(IV, 85)。一方、この詩では女は天上にいた過去のこと(Звездой кровавой ты текла,)は思い出せないが(Не бойся вспомнить)、NDの女は天上から詩人を恋しがっていたことをよく覚えている(Я звездою в пространствах текла.)(IV, 85)、(О тебе, мой легковерный, / Я грустила в высоте.)(IV, 84)。

次の1906年9月の《шлейф, забрызганный звездами...》(II, 105)の詩の「私」と女の関係は先の《Там, в ночной, завывающей стуже,》と同様である。地上にたたずむ「私」の頭上を流れ星が飛ぶ。深い霧が降り、闇が広がり、神秘的な女の顕現する背景が整う。女と「私」の対面は束の間に過ぎ、女ひとり天上に帰って行く。以上の過程を述べる前4連の冒頭と最終行で彗星群の流れるさまが、《Твое лицо бледней, чем было...》の詩と同様にブロークの愛用語である女の着物の引裾“шлейф”にたとえられているが、第5連の「銀色のスカートの襞にふれさせておくれ」(Дай серебряных коснуться складок,)にいたって、NDの第2幕の山高帽の紳士と女の会話にみられるようなきわめて現実的な意味をおびる。もちろんこの連では、逆に天上的な神秘、NPの「私」やNDの詩人が探し求めている「酒中の真理」こそが問題とされているのであるが、興味深いことに、ここでは、冷静な覚めた頭での認識を願っている(Равнодушным сердцем знать,)。

最後の《Там дамы щеголяют модами...》の詩(II, 187)は草稿に「(1906年4月から1911年4月28日)」と付記され、また1912年の詩集では「見知らぬ女(異稿)」と題されていた。この詩は上述の3詩と異なり、現実生活の事物が豊富に列挙されているために、NDのとくに第1幕と第3幕に近いものとなるが、それ以上に、使用されている単語の共通性(дамы, пыль, древные поверья, траурные перья)、物語の舞台の類似(озера, вакзалы / шлагбаумы, Над скукой дач, над огородами/ Над скукой загородных дач, вино)、時の一致(вечер)などの点で、NPに似たものになっている。郊外の別荘地の一角にある酒場で、湖の面に夕日が反射するのをぼんやり眺めていると、なんとももの悲しいような気分になってくる——そろそろ酔いのまわってきた「私」の目の前にあたかも例の女が姿を現し、その訴えかけるようなまなざしで「私」にひとつの問いを投げかける、真理はまさに今この時の彼女と「私」のものであるかと——「私」にはなんともこたえられない、これは酒のせいかな、それとも夢をみているのだろうか——“Скажи, что делать мне с тобой”——この詩をこういう風に要約してくると、これはそのままNPと重なりあう。この詩(NPの約半分の28行)もNP同様、簡単な要約ではおおいつくせない豊富な世界を内蔵しているが、NDの筋との関係でいえば、やはり第3幕の客間に現れた女に主人公が狼狽する場面に対応していると考えられる。しかし両者において狼狽の理由が違っている点が重要で、詩においては、眼前の現実の女が酩酊の影響で観念上の理想(そして、それも女の姿をしている)に見えてくるための狼狽である(主人公が酩酊の影響による感覚の変化を意識しており、事態に心底喜んではない点が注目される)¹⁹⁾。他方、NDの

しらふの詩人の場合は、先に述べたように（詩人と空色の男と女の関係の項参照）既視感のもどかしさから出発し、疑惑をへて、絶望に至っているのである。

結論

NDは確かに同時期のいくつかの詩群から発展してできたものだと考えられるが、NDで追加あるいは強化されている重要な要素として次のようなものがあげられよう。

- 1) 人物の増加によっていわゆる分身のモチーフを鮮明に打ち出していること。
- 2) 現実の醒めた世界と夢や酩酊による幻視の世界の対比がはっきりし、詩群における両世界の境界のあいまいさが解消された。
- 3) 女主人公が発言し、その正体が確認されることにより、正体不明であったがゆえに神聖視され、ある意味で存在感をそなえていた見知らぬ女のイメージが、単なる観念上の虚像または一種のメルヘンの登場人物にすぎないという感を強めたこと。

これらのことから、「叙情劇」と名づけられた「見知らぬ女」の幻想的な書割りの中で主人公の叙情はかなり醒めた手つきで描かれていることがわかる。

(注)

ブロークの引用は《Ал. Блок, Собрание сочинений в 8 томах, М.-Л., 1960-63》により、本文中に巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。

また戯曲「見知らぬ女」の引用には、山内封介訳（「近代劇全集第31巻」所収、第一書房、1930年）を参考にした。

- 1) マーク・スローニム「ソビエト文学史」、新潮社、1976年、122頁。
- 2) 検閲官の報告にある。Selon la citation: Bonneau, Sophie. «L'Univers poétique d'Alexandre Blok», Paris, 1946, p. 406.
- 3) См. Примечания в: «Блок, т. IV», стр. 577.
- 4) См. Предисловие к сборнику «Лирические драмы», в: «Блок, т. IV», стр. 433-434.
- 5) Соловьев, Борис. «Поэт и его подвиг», М., 1973, стр. 344.
- 6) この点については、眼前の女は単なる幻影か、それとも現実にだれか女がいて、それ

が詩的修辞をほどこされるのか、議論が分かれるが、筆者には後者のように感じられる。

- 7) メドヴェージェフはNDの基礎になったものとして、ブロークの挙げた5詩(注15参照)のうち《 Там, в ночной, завывающей стуже... 》は採らず、代わりに《 Лазурью бледной месяц плыл... 》(II, 181)と《 В час глухой разлуки с морем... 》(II, 125)を追加しているが、下書きの状態から、これらの詩からNDが一気に生まれ出たと考えている。См. Медведев, Павел Н. “Драмы и поэмы Ал. Блока”, в: «В лаборатории писателя», Л., 1971, стр. 210-212.
- 8) この詩人はNDと3部作をなす「見世物小屋」のピエロや「広場の王」の詩人と共に「同一人物の心の異なる側面のようなものである」とブロークが規定している。См. Предисловие к сборнику «Лирические драмы», в: «Блок, т. IV», стр. 434.
- 9) メドヴェージェフによると、下書きには、この人物が「空色の雪」と「電灯の青白い反射光」から誕生した旨が記されている。См. Медведев, там же, стр. 213-214.
- 10) グローモフはドストエフスキ「白痴」のムイシキンがナスターシャ・フィリッポヴナを見分けることができたのに対して、NDの詩人が女を見分けることができないのはこの詩人がムイシキンより精神的に貧しいからだとみている。См. Громов, Павел. «А. Блок, его предшественники и современники», Л., 1986, стр. 565. またボノーは見知らぬ女はナスターシャ・フィリッポヴナとは関係がなく、題辞を重視する必要はないと考えている。Cf. Vonneau, op. cit., p. 438.
- 11) グレーロフはブロークの作品における酩酊による空想の飛躍を誇大視しないよう警告しているが(Горелов, Анатолий Е. «Гроза над соловьиным садом», Л., 1970, стр. 178-179)、酒の存在が明示されている場合、それが大きな影響を及ぼしているのは、明らかかなように思われる。
- 12) この2人の関係は詩「夜のすみれ」(II, 34)の主人公とその道連れを連想させる。Cf. Poggioli, Renato. «The Poets of Russia», Harvard Univ. Press, 1960, pp. 196-197
- 13) フォードロフは逆に、空色の男と女の「共通の言葉」での意志疎通が、紳士と女の誤解と対照的であると述べているが、そうは思われぬ。См. Федолов, Андрей В. «Ал. Блок — драматург», Л., 1980, стр. 96.
- 14) Подробнее об этом см. Соловьев, там же, стр. 340-341.
- 15) 1912年刊行の「詩集II」の注解で指摘されている。См. «Блок, т. II», стр. 423.

1 6) Bowlt, John E. "Aleksandr Blok: The Poem "The Unknown Lady"", in: "Texas Studies in Literature and Language", Texas Univ. at Austin, 1975, vol. XVII, pp. 349-356.

1 7) Bonneau, op. cit., p. 229.

1 8) 初版では第2連の後に次の1連が挿入されていた。

Сегодня ты меня заметишь,
Ты роковую связь поймешь
И черным взором мне ответишь,
Змеиным шелестом солжешь.

この4行が挿入されると、とくに第4行が衣擦れを連想させるために、舞台の地上性が強くなる。また1908年の版ではNPの1行《Глухие тайны мне поручены》が題辞として使われていた。

1 9) ジルムンスキイはさらに一步進めて、最後の2行において酩酊をかえて「幻想の世界から現実の世界への道を開いただけだ」と述べている。См. Жирмунский, Виктор. 《Поэзия Александра Блока》, Пб, 1922, стр. 18.